



ヨーロッパ旅路

丹羽恒夫

36. ミュンヘン (München)

10月10日朝、ホテルの一室で眼をさます。駅の構内にあるので、呑気に朝寝をして食事をとり、ホームへ出る。9時45分ザールブリュッケンより来たミュンヘン行急行列車D 545 に乗る。

汽車は秋晴れの野をつつ走ってミュンヘンに向う。なるほど沿線の森林は広葉樹が多い。シュランベルグの工場へ行ったとき、この附近(シュワルツワルド)は針葉樹が主なので、パーティクルボード用の木材はミュンヘン - ストットガルト間にある森林は広葉樹があるので、そこから持ってくると話していたが、たしかに広葉樹は多いようである。

列車の中を見ると壁はパーティクルボードを使用している。私は2等車なので1等車はわからぬが、表面より見た所ノボパンの類らしい。車は例の3人掛けの6人の個室で、片側通路である。

12時39分ミュンヘンに到着する。

ミュンヘンはハンブルグ、ベルリンにつぐドイツ三番目の都市で人口約100万、バイエルン(Bayern)州の首都である。吾々にとっては札幌 - ミュンヘン - ミルウォーキーとビール会社の宣伝に使われたビールの都として懐しい。また私達にとって、ここの大学に

有名な F. Kollmen 博士が居られることで知られている。

荷物をホテルに届け早速目的であるパレックス会社(Parex. AG.) を訪問するが、社長は午後4時30分に帰るからそれまで待ってくれとのこと、もう一度来ることにしてホテルに引きあげる。

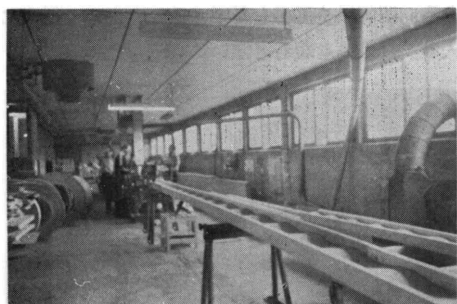
ホテルはプラツェルホテル(Platzl Hotel)と云い市の中心にある。古い建物にとりかこまれた所で近くには有名なビヤホール・ホーフブロイハウス(Hof-brauhaus)がある。

37. ヘルマール会社(Hermal GmbH)

午後4時30分すぎにパレックス社を訪れる。この会社はヘルマール会社(Hermal GmbH)の姉妹会社で経営者も、技術者も同じで、いわゆる木材工業関係のコンサルタント会社である。

まずこの会社で開発した合板梁(パレックス Parex)についてきいてみる。パレックスはドイツでは波桁(Wellstegträger)と云い、写真のように2本の梁の波型の溝に合板を曲げてはめこんだものである。

合板は3プライの合板4, 5, 6mm厚のものを用い普通ドイツ規格でDIN EW 67(尿素樹脂使用-2



製造機より出てきたパレックス

類相当)合格のものをを用い、耐水性を要する所ではフェノール接着の AW - 100 に合格する合板を使用する。

縁の材は針葉樹を用い、合板との接着剤はレゾルシンを使用する。その特色として次の点があげられる。

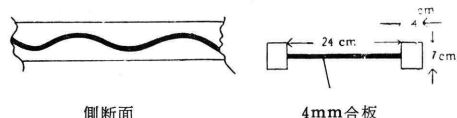
- (1) 普通の木材より50%軽い。
- (2) エンドレスの長さにもってゆける。
- (3) 毎分5 ~ 12mの速度で製造可能

と云うことで、連続製造が可能である。

合板は、たとえばドイツ規格の1枚1.22 x 2.40mを所要の巾に切ってスクーフで接合する。スクーフは1 : 1.5で、150mの長さにして巻いておく。合板の縁材の接着は常温硬化レゾルシンを使用し、接着力は24 kg/cm²で木部破断するそうである。出来上がったパレックスの曲げ強さは許容力の約3倍 200kg/cm²でも破壊しないそうである。

機械能力は 1500m/日 (8時間) で作業人員9名である。

この大きさの表し方は数字の組み合わせで、例えば図の様なものは24/3.4/ 7 / 4 mmで表現する。これを実際に造っているのは工場ミルテンブルグ (Milltenburg) にあると云うので、13日に見に行くことにする。



側断面

4mm合板

その後ヘルマール法のパーティクルボードについて説明をきく。会社の方ではこの方法を日本に是非紹介したいと云うので熱心である。私が今迄の設備は装置費が高いので 30ton級以下では採算が困難なので貴社の説明に注目していると話した所、自社の設備は他社にくらべ安価であるから是非見てゆけとのことである。紹介してもらってオーストラリアの工場を見ることにした。明日から土、日曜でどこも休日であるから

明日はミュンヘンで過ごすこととし、明後日、日曜日の昼、出発ミルテンブルグに行き1泊、翌月曜に工場を見て帰ることに予定をきめた。

夕食を丘の上のレストランでとったが、そこより教会の尖塔がよく見える。話によるとこの塔にミュンヘン空港へ到着か、とび立ったばかりか、失念したが、BOAC のジェット機がぶつかり、飛行機は町の中のもの、たまたま通っていた市街電車の上に落ち、通行人ともども 100人以上の死者を出した惨事が2年程前あったそうである。

ホテルに戻りホーフプロイハウスに行ってみる。ここは1800年代に出来たピアホールがあり、ゴシック式のゴツイ建物でホールは1階と2階で1階は比較的労働者や一般大衆が多いようで、2階は比較的インテリが多いようである。今までピアホールでビールと云うと1/21位、多くて3/41のジョッキであったが、ミュンヘンに来るとビール1杯と云うと小さくても11のジョッキである。おつまみは駅売や映画館で仲売するように箱を吊って売りに来るばあさんから買うのである。広い室であるから何百人入っているのか見当もつかない。楽団があって演奏しているが、皆一緒に歌って愉快地騒いで居り、"ビールを6人で飲んだが誰が支払うのやら、"と云うような歌などうたってわあわあ、やって居る。この楽団は皆の寄附で維持されるらしく時に皿が廻って来て皆10ペニツピ位入れているようである。

出口に売店があって記念の写真、絵葉書、人形、ジョッキ等を売って、なかなか売行はよいようである。

38. ミルテンブルグへ

11日は土曜日なので有名なドイツ博物館へ行った。市庁舎に有名な塔があってこの塔は午前11時の時刻をつけると(鐘が)、塔の上に飾られた12人の人形が動きながら鐘が鳴ると云うので見ようと思っていたが、博物館に出かけて失念したので見られなかったドイツ博物館 (Deutsches Museum) はこの町を流れるイザール河 (Isar) の川中島にある。

この館は工業技術に関する博物館で案内書によると、この種では世界一の規模と設備だそうである。

入っておどろいたのは炭鉱、鉄鉱の採掘現場の古くから、現代までの模型で、殆んど実物大で建物の上から地下室まで利用して、実際の炭鉱のような感を支えている。実物大なのでわかり易い。その他、精錬する所、或は電気関係にしても歴史的、或は水車発電等、水を実際に流している。交通の部門では馬車の時代から現代のスポーツ車、列車に至るまで実物で展示して

あり、全部詳細に見ようとすれば5～6日かかるようである。

翌12日、日曜であるが12時18分ミュンヘンを出発、ニュルンベルグに向う。ニュルンベルグ(Nürnberg)は第二次大戦で町の大部分を破壊されたが、玩具が有名で毎年玩具貿易博覧会がここで開かれるそうである。精密機械が造られているそうで日本のカメラ屋さんの修理所もあるそうである。

午後2時29分ニュルンベルグで駅を出るとヘルマール社のスタウディンガー氏(K. Staudinger)が待っていて、早速自動車でミルテンブルグに向う。

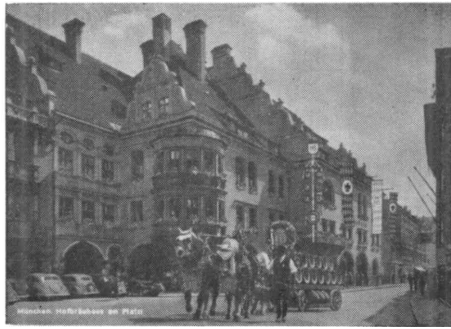
乗用車は日本にも入ってきているベンツの大型車である。

午後6時頃ミルテンブルグに到着する。ミルテンブルグはマイン河畔の町で、フランクフルトに近く、前にモザイクフロリングの工場を見に行くと通った町で、恰度逆戻りした形になる。

河のほとりにあるローゼホテル(Hotel Rose)に宿泊する。マイン河もこのへんでは河巾も広く小型の汽船も入ってくる。柳も点在し古い建物の影が水に写り絵画的な町である。ドイツのウナギ料理はうまくないぞと云われていたのであるが、ここの名物だと云うので、ものはためしと云うわけで注文してみたら、たしかに大味でありおいしくなかった。形は大きい。

宿もバイエルスブロンと同じく古い宿で中世の感じ

である。明朝早く工場を見学することとして早目に床に入る。11月にもなると寒い。



ピヤホール ホーフプロイハウス



ピヤホール内部

- 林指合板研究室 -